

奴田山（青木山）について考える

・ ・ 山師と山伏の影を追って ・ ・

会津大学短期大学部

名誉教授

渡邊 幸夫

## 奴田山（青木山）について考える

### ・ ・ 山師と山伏の影を追って ・ ・

渡邊 幸夫

平成25年1月10日受付

【要旨】会津若松郊外にひとつの風景を描く、奴田山（青木山）の歴史民俗が話題を呼んでいる。この山の名称は本邦でも殊に希である。またその昔、山師や修験者の影が見え隠れした山麓の、歴史地理や民俗に関する話題は興味深い。前稿に続き本稿ではこの山城の小字名を論拠とし、奴田山に加えて奴女入（旧川溪村）の名称由来や、青木の麓山神社鎮座位置などを論考する。

#### 1. 山名由来に係わる小字名

ア 旧大巢子村の小字名には谷地平・奴駄平・奴駄山・奴駄原・霜降などがある。

イ 門田町御山の小字名コードには、奴田山甲がある。

ウ 青写真地図（会津若松市役所税財務部務課所蔵）では小字名奴田山を確認した。

本地図（青写真複写）の原図は手書きで、原図製作年代その他は詳細不明である。

#### 2. 山名と地形図への記載理由（次の2仮説の内どちらかが該当すると考える。）

ア 山の名称は御山小字名コード欄の奴田山甲や青写真地図上での奴田山に由来する。

イ 地形図（5万図）作成時に奴田・吹矢山系東側での呼び名（奴田山）が採用された。

#### 3. スタおよびヌダについて

ア 「スタやヌダ」は蔑視や蔑称と関係のない日常用語である。

イ 「スタやヌダ」は地勢を指す用語で、湿地を意味する（未発達幅広い沢状の土地や窪地を含む）。

ヌダの語義は山中の湿地である。

ウ 大巢子集落周辺に「スタやヌダ」のつく小字名が多い。これは全国的にも希である。

エ 山名は「ヌダヤマ」から「ヌタヤマ」へ変わり、「駄」の当て字として「田」を用いた。

オ スタノ原山（新編会津風土記・大巢子村）に関する「スタ」の呼称はエの証といえよう。

#### 4. 奴女入（旧川溪村）に係わる小字名の由来（推測）

大正時代初期に奴女入付近から金が採掘された。金鉱石の冶金には丹生（辰砂、硫化水銀）を必要とする。これは次の「イ」と「ウ」との推測を生む。

ア 「奴」は「ヌ」と呼び、湿地を意味する。

イ 「女入」は「女布」から転訛したものである。

ウ 「奴女入」とは辰砂の採掘に由来する地名である。

#### 5. 青木麓山神社の鎮座位置と上ホシ山について

前稿で推察した通り、青木の麓山神社は上ホシ山の中腹に鎮座している（平成24年3月22日参拝）。

## はじめに

山の名称の多くは山麓住民による呼名であり、それは自然や文化に関係があるという。なかには複数の呼び名をもつ山も珍しくない。このひとつの例が会津若松近郊の奴田山（青木山）であり、加えてこの山名は殊のほか珍しい。昨今市井ではこの山麓に纏わる歴史や民俗が話題を呼んでいる折から、山名由来ばかりでなく修験（山伏）や鉾山（山師）の痕跡を論考することも意義深いと考えた。

そこで本稿では奴田山に関する興味深い次の3点を中心に考察したい。

- A 奴田山の名称と小字名（字限図）との関係。
- B 奴田・吹矢山系山麓における修験や鉾山の痕跡・・・妙見と奴女入について。
- C 麓山神社（青木集落）鎮座位置・・・上ホシ山について。

A に関し前稿<sup>1)</sup>では廃止された大巢子スキー場のゲレンデ名を挙げ、これを奴田山の山名由来の論拠とした。その一部を改めて記すが、なおこれには大巢子村の字限図を参照し小字名の確認をする必要があった。

- ア ゲレンデ名称（奴駄平・谷地平・霜降などの小字名）は山名と関係がある。
- イ 奴駄平や谷地平の小字名は地勢（湿地）に因むもので、もともと奴田山の名は湿地を意味する奴駄山であって、田は駄の当て字である。

大巢子村は明治6年に湯川村に属することとなり、次いで明治22年に東山村に組み込まれた。小字名を調べるには大巢子村当時の字限図を参照すれば良いが、この望みは叶わなかった。そこで字限図以外の文献を検索した所、東山村の沿革に触れた書籍<sup>2)</sup>（以下本書）や市町村区分の小字名コード<sup>3)</sup>などに問題解決の糸口を見出したので、これに沿って論考する。

## 論 考

自然や文化が山名におよぼす意味内容は多岐に渡る<sup>4)</sup>、自然と文化に対する本稿での視点を考えたい。一般に自然とは人手（技術）が関与しない天然（ありのまま）の状態をいう。言い換えると人工物に対する術語である。そこで自然をふたつに区別して考える。

- A 山容（姿や形）・地勢に加えて天候や天体の現象とそれらが他におよぼす影響。
- B 生息する動植物などに対する人の係わり方とそれが他に与える影響。

一方の文化については次のように考える。

- 古くから農業・漁業・鉾山などの技術に加えて宗教（神道・仏教・修験道）は、思考（ものの考え方）や生活のあり方に影響を与え、これらを変化（発展・向上）させてきた。しかし技術（工夫・知恵）や思考などのもつ意味内容が時代と共に変遷（推移）しても、その本質は変わらない。
- 本質とはその物事（事柄）における最善とは「如何なるものか、如何にあれば良いか（状態・状況）」など良否を問い続ける姿勢である。これは現代でも科学として生き続けている。

以上から本稿は文化のもつ一側面を論じるもので次のように纏める。

- A 文化は上述の問とその応答（思考・技術・知恵・工夫など）の集積から成り、これは現代の諸事一般に

も反映し影響を与えている。

B 生活を営む上で思考や技術を鍛錬する余裕がなければ、文化は育まれない。

## 奴田山の名称の由来

本書<sup>2)</sup>や市町村小字名コード<sup>3)</sup>(以下小字名コード)は、旧村名ごとに分別して記載されていない。例え小字名一覧に奴駄平・谷地平・霜降畑などの地名を見出しても、それが東山町または旧東山村では何処に当るか、特に注目する旧大巢子村の何処にあったかなどについては分かり難い。

この難点は東山町小字名コードや会津若松市役所税務課所蔵の地図<sup>5)</sup>(以下市役所地図)上で旧村名(石山・湯川・湯本など)の位置を検討することで解決出来ると考えた。具体的には本書・小字名コード・地形図・新編会津風土記<sup>6)</sup>(以下会津風土記)を互いに対照させ、かつ下記の点を検討すれば良い。何故なら地名はその土地の地勢に因むことが多いことから、大巢子村周辺の小字名の概要も把握し得るといえよう。次にその手順を記す。

- A 5資料(本書・小字名コード・市役所地図・地形図(2.5万図)・新編会津風土記)間で相互に対照させて、同じ地名や小字名、加えて類似する小字名を探す。
- B 東山町小字名コードの中に旧村(湯川村・湯本村)の大字名を探す。
- C 谷地・沢・田・畑などの付いた湿地に関連する小字名を探す。
- D 旧住民との対話により関連知識を得る。

### 1. 小字名(奴駄平・谷地平・霜降畑)は東山町(村)に実在したか

#### ① 奴田・吹矢山系東側に認められる小字名

##### ア 大字湯川から大巢子の小字名を調べる<sup>3)</sup>

合併前の湯川村は旧村名5村(川溪・大巢子・一ノ渡戸・二幣地・<sup>ほおずき</sup>酸漿)から成立し、二幣地は端村中湯川と西湯川を含んでいた<sup>2)</sup>。具体的に本書記載や小字名コード番号がつく土地の位置を知るために、地形図(2.5万図)や会津若松市役所に保存された地図を参照し、その所在を調べた。結果を以下に示す。

- A 本書にある湯川村の小字名総数は230ほどある。この中で確かに大巢子集落には鷹林(小字名)が存在する。しかし小字名コードには鷹林の記載がない。  
大巢子の名称は鷹に因んだとの伝承があり<sup>2)</sup>、本書で鷹林に隣接し記載された幾つか地名は大巢子や一ノ渡戸集落の付近ものといえる。  
大巢子集落付近に記された小字名には、鷹林・谷地平・霜降畑・箕輪・焼野・原山・奴駄平・奴駄山・荒田・奴駄原・大高森山などがある。
- B 町村名は都道府県市区部コード・町村コード・小字コードの番号で区別されている。湯川村に関する小字コードの総数は236あり、本書<sup>2)</sup>のそれより僅かに多い。なお完全に一致するとはいえないが、類似名称の小字名を少数認める。
- C 小字名を市役所地図<sup>5)</sup>で確認した所、大巢子集落周辺には谷地平・鷹林・焼野を認めた。大巢子集落から距離をおいて、南西から東方向に箕輪・奴駄山・奴駄平が存在する。霜降畑は小字コードでの霜降乙と考えられるが、市役所地図<sup>5)</sup>には霜降畑の名称がない。
- D 市役所地図<sup>5)</sup>では、奴駄山・奴駄平の南に地形図(2.5万)記載の萱野山が位置する。その東隣には奴駄原丙がある。奴駄原丙から東方へ辿ると沼ノ平丁を経て一ノ渡戸集落に至る。なお一ノ渡戸集落の南西方向には沼

ノ平戊の名がある。これより南および南東方向には荒田・箕ノ輪・萱平・山梨山などの小字名がある。

- E 大巢子集落は湯ノ入り 5 村の中で最も水田と山林の所有が多い<sup>2)</sup>。奴田（湿地）に類似するものや一文字違いの小字名には、谷地平・霜降畑・原山・奴駄平・奴駄山・荒田・奴駄原・長窪などがある。原山は新編会津風土記でいうヌタノ原山であろう。なお前稿で述べた川溪集落のぬめいりの奴女入の小字コードは奴女入甲である。
- F 奴田平・奴駄山・奴駄原の読みは、ヌダタイラ（ヌダダイラ）・ヌダヤマ（ヌタヤマ）・ヌダハラ（ヌダノハラ）である。
- G 大巢子集落周辺では「ヌタやヌダ」という音が日常聞き慣れた響きであり、蔑視や蔑称を意図するものではない。「ヌタやヌダ」は地勢を示す用語で湿地を意味する（窪地や未発達<sup>おん</sup>の沢状の地形をも含む）。
- H 大巢子集落周辺には「ヌダやヌタ」のつく小字名が多い。これは全国的にも稀である。蔑視や蔑称を意味するのであれば、住民が自らの生活地を蔑むことになり、これほど多くの類似地名が存在する筈がないと考える。「駄」は呉音で「ダ」、漢音では「タ」と読む。奴田山の山名も「ヌダヤマ」から「ヌタヤマ」へ「田」を当て字に用いて変わったとしても不思議ではない。
- I 上記Hを解釈するに際し、ヌタノ原山（新編会津風土記・大巢子村山川の項）のヌタはその証のひとつとなる。
- J 五輪壺石・五輪沢・五輪坂などは大巢子と一ノ渡戸の中間に位置する。加えてぬめいりの奴女入・下川溪・猿滝・猿滝向などは川溪集落周辺に位置し、中湯川向・沼ノ平・中湯川入などは二幣地（中湯川）だと読取ることが出来る。
- K 釜のつく小字名が散在する。釜田とは泥深い田（湿地）であり、釜の字は興味を引く。大巢子集落の東方に釜ノ前・滝釜があり、一ノ渡戸の奥には三ツ釜・大釜・大釜道・四ツ釜・九ツ釜などがある。

以上からゲレンデ名称（奴駄平・谷地平・霜降など）は小字名（奴駄平・奴駄山・奴駄原・ヌタノ原山・谷地平・霜降畑などの湿地）に由来するといえる。またその昔、大巢子集落近隣では奴田・吹矢山系の峰々のうちのひとつをヌタヤマあるいはヌダヤマと呼んだと考える（青木・御山集落ではこの峰を青木山と呼ぶ）。

なお総数 230 のうち興味深いのは同名や類似する小字名の存在である。その一部を抜粋して記しておく。

- A 梨木向・梨木平（2ヶ所）・山梨沢・山梨、B 箕輪・箕ノ輪、C 荒田（2ヶ所）、  
D 栗木平・栗山・栗木平山、E 谷地平（2ヶ所）、F 沼ノ平（2ヶ所）

#### イ 大字湯本（湯本村）の小字名<sup>3)</sup>

湯本村は背炙山系と奴田・吹矢山系との間の谷間に存在した。当村の小字名の総数は 32 ある。このうち山のつく小字名は 18 であり、なかでも早倉・羽黒山・水沢山・背炙山などは聞き慣れた地名である。

#### ウ 大字石山（石山村）の小字名<sup>3)</sup>

藩政時代に旧南青木組 慶山村・天寧村・院内村が合併し石山村となった。当村の小字の総数は 64 ある。湿地と係わりある小字名は、和田・小深田・下谷地・大田・柳田・川原田・水尾・沼ノ平・山吹沢・泥沢・野女子・沢ノ入・沼東・沼ノ平山・竹ノ子沢などである。野女子については、補足の項に記す山岳語彙（ヌタ）を参考にして湿地と推察した。また山のつく小字名は 24 ある。

住宅地に開発された千石ニュータウン・桧町が和田・小深田・大田などに相当する。昭和 50 年頃の現状は、湿地・ヒドロ田・溜池が散在していた。

## ② 奴田・吹矢山系西側に認められる小字名

ア 御山・黒岩の小字名（青写真地図<sup>7)</sup>と小字コード<sup>3)</sup>）◎ 青写真地図<sup>7)</sup>

青写真地図（会津若松市役所税務課所蔵、作成時不明、手書き）は貴重である。しかし複雑な小字境界の故に、その面積表示は正確さに乏しいといえる。奴田・吹矢山系の稜線沿いに北から南へ小字名の一部を記すと、荒原沢山→風口山→大平山→御徒萱山→奴田山→羽黒平→牛ヶ首→沼上などとなる。官林繪図面<sup>8)</sup>（黒岩村、明治8年）にある峠山の記載がないが、この青写真地図上において小字名奴田山の存在が確認された。

◎ 御山・黒岩の小字コード<sup>3)</sup>

御山の小字コード欄には奴田山甲・沼上甲・羽黒平甲などの記載がある。その一方で青木のつく字名は町村小字コード欄<sup>3)</sup>（御山・黒岩）に見当たらない。この理由として青写真原図が地形図（5万図）を参考にして作製されたために、青木山の名称が消え、その一方で奴田山が記載されたとも推察する（次項を参照のこと）。また黒岩の小字コード欄に御徒宣山とあるが、これは御徒萱山の間違いである。

御山の柿畑は奴田・吹矢山系西側山麓の開墾地であり、石積して平場を造成した跡が点在する。農作業中の住民の話では平場は昔の住居跡で、この辺は湿地（沼地）であったという。

- A 元々この一帯は湿地であり、千石バイパスが開通するまで城南小学校付近にはヒドロ田（泥田・ふけ田・釜田・む田）もあった。過去に土石流が起きて、その被害が千石バイパス周辺にまでおよんだ。
- B 石積み造成の平場はかつての住居跡であり、その昔には黒岩神社が祀られていた。

## 2. なぜ地形図に奴田山と記載されたか（仮説）

ふたつの仮説を考えるが、山名の起源は何れも自然の要因（地勢、湿地）に基づく。

仮説 A 御山の小字コード欄<sup>3)</sup>や青写真地図<sup>7)</sup>上での奴田山甲、奴田山に由来する。

仮説 B 地形図（5万図）作成時に奴田・吹矢山系東側での呼名が採用された。

青写真地図の原図作成時は不明であるが、仮説 A は順当な推察であろう。しかし小字名での奴田山甲があれば、少なくとも奴田山乙は存在する筈である。それが青写真地図や小字コード欄には見あたらない。また奴田山と記載すれば他と区別し得るのに、「なぜ小字コード欄に奴田山甲とあるのか」、これについては疑問が残る。そこで仮説 B をさらに検討することは意義深いと考える。

稜線を境とし名称を異にする山がある（例に会津側での荒海山・赤崩山に対応し、栃木では太郎山・旭岳と呼ぶなど）。これに倣い「奴田・吹矢山系の東側集落では奴田山といい、西側では青木山と呼んでいた」とも考える。因みに青木山の山名を記す書籍には「新町諸品之覚書<sup>9)</sup>」と「佐野氏随筆<sup>10)</sup>」があり、前者の年代は1685年、後者は不明である。文献9からみて江戸時代初期には、既に青木山の呼称が存在していたものといえよう。

旧陸軍測量部による地形図（若松、5万図）作成は大正2年である<sup>11)</sup>。測量部は現地測量時に山名を地元住民に糾<sup>ただ</sup>している筈であり、軍が勝手に名付けたとは断定できないまでも、結果として山系東側の呼び名（奴田山）が採用されたと推察する。また稜線を挟んで両側ともに湿地帯であることから、西側山麓集落（青木・御山）では時の御上<sup>おかみ</sup>（政府・役所）の権力（決定）に反論しなかったとも覗<sup>うかが</sup>われる。

なお近隣の類似例を挙げておく。奴田山の南西方向大戸町に位置する草山（486.9m）の別名は、カニサワヤ

マである<sup>12)</sup>（2.5万地形図には草山と記載）。

### 3. 奴田・吹矢山山麓に修験者と鉱山師の影を探す

#### ① 山伏と山師の痕跡

熊野信仰が12世紀に栄えたことに前後して羽黒信仰も盛んとなり、会津地方でも山師や修験者が往来したといえる。この裏付けとして喜多方市慶徳の新宮熊野神社にある長床や宝器が有名である。また若松近郊の修験では天屋宮内の金峯山平楽寺、東山の羽黒山神社（東光寺）や南岳院が知られる。なかでも羽黒山湯上神社は東北三大羽黒山神社のひとつであり、その前宮として妙見大黒神社を祀る。湯上神社の西方には妙見岩または護摩壇と称する岩があり、雨降滝の手前北側の洞窟に虚空蔵尊の小祠も祀られた<sup>2)</sup>。愛宕神社勧請も山伏玉泉が関与する。

熊野修験と鉱山との係わる例には、熊野派修験中常坊による金銀採掘がある（慶長十年耶麻郡北塩原村檜原）。また会津若松東山の羽黒神社旧参道沿いにも廃坑跡が多く見られるという<sup>13)</sup>（筆者は廃坑跡を未見聞）。

溪山から山に入った沢で砂鉄に混じる極微量の金を認めた話<sup>25)</sup>や、東山町湯川には銅屋沢の小字名があり、さらに後述する奴女入の例の他にも、奴田・吹矢山系では羽黒平（市役所地図・小字名コード・岩代國若松縣第一大区全図<sup>14)</sup>）の地名が残るなど、これらは奴田・吹矢山山麓における修験と山師の痕跡を示すものといえよう。

#### ② 奴田・吹矢山系における妙見

滝澤<sup>17)</sup>は奴田山の南方に山伏塚の座る峰（724.5m、以下本峰）を妙見山とする。しかしこの山名の証となる文献や資料は見当たらない。前稿<sup>1)</sup>では、この無名峰（妙見）と牧との関係説明は興味深いと論じた。因みに東山院内の湯川左岸（七面大天女神社近隣）の小字名には牧ノ平甲・牧沢・牧沢上ノ台甲・牧沢下甲などがある。

その一方で妙見の位置が上ホシ山の南方の尾根筋（川溪8号橋から西方向）であることから、前稿で触れた鉱山との係わりも関心をひく。即ち会津の金山として古い朝日鉱山が妙見に近い位置あり、これと妙見との関連は今後の課題である。また他地域における妙見と鉱山に関する文献<sup>13)</sup>も参考になる。

なお岩代國若松縣第一大区全図<sup>14)</sup>には妙見と上ホシ山とが別記されている。星に関連づけて短絡的に妙見と上ホシ山との位置を、同一と見做すことは誤りである。

#### ③ 奴女入（ヌメイリ）の地名由来

東山から川溪への道は寛政12年（1800年）に拓かれた。それまでの東西集落間交流は主に奴田・吹矢山系を越えて行われていた。奴女入（小字コードには奴女入甲）は旧川溪村に属し、現在は東山ダムの湖底に眠る。東山から川溪に向かうと村入口にあたる地点が奴女入<sup>（ぬめいり）</sup>である<sup>15)</sup>。住居はなく湿地であり、ダムが建設される以前は主に野菜を栽培していたという<sup>15)</sup>。なお小字コードに奴女入乙や丙などはない。

大正時代の初め村入口の湯川沿いの地点から金が採掘されている<sup>2)</sup>。これを証として、奴女入という地名は金採掘に由来するものと推察する。なぜなら下記のごとく奴女入を表わす文字を考えると、アマルガム精錬<sup>（にゅう）</sup>や丹生と関連する共通点がある。

アマルガム精錬とは金鉱石から水銀（丹生）を含む朱砂を利用して、金を採取する冶金である。水銀は朱砂（丹砂）を蒸留して得る。これは極めて古い歴史をもつ方法であるが<sup>16)</sup>、以下に簡約しておく。

先ず丹生（水銀）を用いて金や銀を溶解させると、合金（アマルガム）ができる。丹生含量の多いアマルガムは液状をも呈するが、通常は個体である。次に合金（金アマルガム）を加熱すると水銀が蒸発（気化）する<sup>16)</sup>。このような手段により水銀を除去して、黄金を得る訳である。

朱とは赤色の顔料で、成分は硫化水銀（硫化第二水銀）であり、天然には辰砂<sup>しんしゃ</sup>として産する。この朱砂の産出を意味する「ニフ」のつく地名を、漢字では「女布<sup>にふ</sup>」と表わした<sup>16)</sup>。

またニフの当て字に「入」を用いたため、山の名でもニフ山から入山となった。そして何時の間にかイリヤマと読まれ、例として大入・大入口・東大入・中大入・奥大入などの小字名がある。即ち「入」の字は丹生の転訛したものである<sup>16)</sup>。以上の見解を「奴女入」の文字に重ね合わせて、奴女入（小字名）という漢字の意味を考えると、その結論はDとなる。

- A 「奴」は「ヌ」と呼び湿地を意味し、住居として不適切な土地であった。
- B 「奴女入」から金が採掘された（大正時代初期）。
- C 「女入」は「女布」から転訛したものである。
- D 「奴女入」とは、山師（修験者）による丹生（辰砂）の採掘に由来する地名である。

#### 4. 青木集落の麓山神社

30年位前まで主に北青木の人々が青木の麓山<sup>はやま</sup>様にお参りしていた<sup>17)</sup>。しかし昨今では祠を知る人も少ない。前稿<sup>1)</sup>で麓山神社は上ホシ山の山麓（中腹）に鎮座すると推論したが、この推論は正解であった（参拝・平成24年3月22日、補足を参照されたい）。これを根拠として重ねて次の2点を強調する。

- A 上ホシ山の中腹に祠が鎮座する事からも、「上」は「カミ（神）」の当て字である。ウエホシヤマではない。
- B 「ホシ」は「ボウジ」の転訛であると考えられるが<sup>18)</sup>、さらに青木や御山の官林繪図面や字限図上で上ホシ山の記載を確認する必要がある。

##### ① 祠について

祠の正面は西向き、他に石柱がある。祠は山伏塚のそれより大きい。

石柱には南面に「享保五年」、北面に「子 八月八日」、また東面には「奉納御宝前」と刻字がある。享保五年とは西暦1720年である。





久住川太助氏・同行・写真撮影、平成24年3月22日

## ② 水分の神とボウジ

因みに「なぜ上ホシ山に神が宿るのか」について、別の観点（水分の神<sup>みくまり</sup><sup>16、19</sup>）から推考する。これは上記Aをさらに強調する鍵となる。即ち「ボウジ」と「水分の神<sup>みくまり</sup>」とは地勢に関して共通点（尾根・分水嶺）があるが、その根源（意味）は同じでない。しかし時を経るに両者の区別に関する理解が乏しくなり、次第に共通点のみが強められて誤解と混乱の源になったと考える。

古代には水分の神<sup>みくまり</sup><sup>16</sup>（分水嶺を司る國境神ともいえる）の信仰があった。初めは水流の分別を司る神として国境に誕生した。その後で「分」の字が配分の意味に曲解され、また折からの水田耕作発展を反映して水利の守護神となる。この神には雨乞いや長雨の止雨さらに稲作の豊穰祈願が根強い。加えて水田開発した為政者により神社名が変わることも考えられる<sup>19</sup> という。

一方で「ボウジ」は領地の境界を示す尾根を意味する<sup>18</sup>。しかし分水嶺や領地境界尾根など山から受ける恩恵とその誕生由来の区別に対し、次第に誤解と混乱をきたし、これが両者を混合する概念を生んだと推察する。「ボウジ」にも神が宿る意味を含めて解釈したと考える訳である。

なお水分の神<sup>みくまり</sup>は古代の大和の国に誕生したが、なぜこの名称がついたのかは不詳である。また分水嶺や水源については何らかの原始的信仰が存在したであろうという<sup>19</sup>。分水嶺や水源などによる恩恵は重要かつ全国どの地域でも同じであり、それを司る神が古代会津に生まれても不思議でない。

仮定ながら神は「上ホシ山」における「上」と「ホシ」の双方に係わるといえよう。

- A 上ホシ山の由来を知る上で、「水分の神<sup>みくまり</sup>」と「ボウジ」はこれを解く鍵と考える。
- B 「ボウジ」は尾根境界を「水分の神<sup>みくまり</sup>」は分水嶺を意味したが、時を経て混乱を生じた（仮定）。
- C 尾根境界という共通点から、「水分の神<sup>みくまり</sup>」と「ボウジ」が同じ概念の下で解釈された（仮定）。
- D 意味の錯誤から、「ボウジ」は神と繋がり、これがさらにカミホシ山のカミを生んだ（仮定）。
- E 上ホシ山のカミの概念は水分の神の他に、夜刀の神（後述）のそれも絡み合っ成立した（仮定）。

## ③ なぜ青木麓山神社の祠は山腹に鎮座するのか

青木麓山神社の尊厳を守り随時境内に立入るべきではないが、その鎮座位置も忘れられつつある現状を勘案すれば、触れておくことにも意義があると考えた。

東北地方南部のハヤマ（麓山・葉山・端山）信仰では姿形の良い里山の頂<sup>20)</sup>や、丘陵の端<sup>26)</sup>に祠が鎮座する。しかしいつでも境内に立ち寄れる訳ではない。なぜならハヤマへの登拝に先立ち別火・垢離など厳粛な精進潔斎のため籠りを務める必要がある。また女子は登拝や籠りに参加出来ない<sup>20)</sup>。

この信仰の基層には農耕を司る作神と子孫を見守る祖霊への尊厳がある。加えて儀礼や祝詞、経文などには羽黒派修験や神道、仏教の影響を伺える。即ち祖霊、作神、修験、神道、仏教への信仰が絡みあったものといえる<sup>20)</sup>。次に青木や小田の麓山神社の祠が、「なぜ山頂でなく山腹に祀られたのか」について考えたい。

#### ア 聖と俗との境界となる 梘（ウダチ、ウダツ）・標の梘

古代の人々の考えでは、死後の靈魂はこの世でもある特定の場所（黄泉の国）に逝く。仏教が広まる前には現世や来世の観念がなく、死後の世界をこの世の延長にある異境の地とし、現世に生きる者は決して指定された（特定の）区域（地域・土地）に出入りできない<sup>21)</sup>。

この概念の下に稲作が始まり、湿地（窪、谷、谷津）を水田に利用した。稲作の普及に伴う湿地の水田化とは、異境の地へ侵入しその地を開拓することである。収量を増やすためには、黄泉の国の領地へ立入らねばならない。この二律背反を回避する手段として、神と人の住み分ける境界を明確にする方法を考え、境界標識となる大きな杖（梘）を立てた<sup>22, 23)</sup>（靈魂と神の関係は後述）。梘とは梁上の束柱であるが、後述する常陸国風土記（夜刀の神伝承）では聖と俗との境界を示すものであり、これを標の梘という<sup>23)</sup>。言い換えれば境界杭ともいえる。神は梘の上方を、人（水田）は下方を占有する。その後には梘の代わりに社を祀ることになる。

因みに占め（注連、しめなわ）とは占有の標しであり、物を他の物体に結び付けることを意味する。後述する夜刀（ヤト、ヤツ）の神の伝承とは人々による耕作地拡充を記したものである<sup>22, 23)</sup>。

#### イ 神と悪霊

古代人は靈魂による働き（作用）を次のように捉えたという<sup>24)</sup>。靈魂の働く可能性は二通りあるとし、将来に渡り良い働きを期待できる靈魂と、そうでない靈魂とに区別した。前者が神として敬われる靈魂であり、後者の靈魂は悪霊（妖怪）とし忌み嫌われる。麓山信仰の根底には子孫繁栄と農耕での豊穰祈願があり、敬服する靈魂を神として尊んだのである。このような概念の下に、青木麓山神社の信仰でも梘（ウダチ、ウダツ）として祠を中腹に祀ったと推察できる。因みに高山も魂の行き着く所と考えられた。天空に立ち上る火葬の煙が高山との関わる観念を産んだという<sup>21)</sup>。

靈魂の数は無限であり、人々は多くの神を産み続け信仰したが、仏教・道教・儒教・修験道は神々を整理体系化している。なお補足の項に青木麓山神社の参拝と山伏塚の祠に関し記す。

#### 結 び

古代の人々の生活基盤は、標高の低い丘陵やその中腹であった。しかし水田耕作の普及に伴い、ハル（陽の当たる丘陵面）からムタ（低湿地）へ移住している<sup>16)</sup>。「夜刀の神」の伝承<sup>22)</sup>はこの移住の証でもある。その一方で「なぜ麓山神社（祠）が山腹に鎮座するか」を解く鍵ともなると考えた。

ところで奴田・吹矢山系には無名ながら山伏塚の座る峰もあり、時折修験者の話を耳にする。しかしこれと相重なる筈の山師の活動は殆ど知られていない。石ヶ森鉦山（金堀）、朝日鉦山（門田石村）や奴女入（川溪）での金採掘があり、また身近な例では溪山近くの沢にも極めて微量ながら金を含む砂鉄があると聞く<sup>25)</sup>。この興味

深い山麓の更なる資料や文献を求めて、山師の鮮明な影と足跡を探し当てたいと念じて結びとする。

## 謝 辞

ご助力下された石田明夫先生、佐々木長生先生、佐藤一男先生、会津若松市役所財務部税務課職員各位ならびに久住川太助氏に深謝致します。

## 補 足

### 1. 青木麓山神社への参道

重ねて麓山神社の信仰として境内への立入には尊厳を守る節度があり、普段の日の参拝を忌み嫌う。勝手に境内に踏込むべきではない。この信仰全体に共通する特徴はハママへの登拝に先立ち別火・垢離など厳重な精進潔斎のための籠りが存在する。滝澤<sup>17)</sup>や住人によると、30年位前まで青木の人々は麓山神社に参拝していた。しかし今日では鎮座位置も含めて忘れられつつある話となった。

一般に麓山（葉山・端山）神社は里を見下ろす山頂<sup>20)</sup>か、または平地に近い丘陵の端に祀る<sup>26)</sup>。しかし青木の麓山神社は中腹に鎮座する。本来の参拝は麓から参道を辿るべきものの、現状は藪に帰し参道が分かり難い。次のFは参道の登り口と言えるが、祠への到達には難儀しよう。

これに対して祠の尊厳を守る礼儀作法に反し不謹慎ではあるが、稜線尾根から藪を漕ぎ降り探す方が当惑しないと考える。なお稜線上から祠方向へ降り、途中で消滅する小径を記す古い市街地図<sup>27)</sup>がある。この小径は登拝路の名残といえよう。

### 2. 麓山神社への参拝

- 麓山神社の尊厳を守り、読図と藪山登山の熟練者に同行のうえ、何事も自己責任で行動のこと。
- 隠れピークとは地形図で読み解く峰である。
  - A 青木山登山小田山と麓山コースの合流点は隠れピーク（600m）である。さらに南方に尾根筋を辿るとほぼ標高660mの隠れピークに至る。標高660m付近は境界見出標の目印がある。
  - B 登路左側に「12ホ1」、その上部右側には「境界見出標12」の札が立木に固定してある。
  - C 標高660mの隠れピークから北西方向に走る尾根に乗る。この尾根には標高630m付近に隠れピークがあり、その峰から北西と西方向に枝尾根が分岐する。
  - D この西方向に向かう尾根に乗ると、標高550m付近にて青木の麓山神社に達する。
  - E 麓山神社から澤を左に見て西方向に降り、凡そ標高500mで北西に進路をかえて宮沢川を目指す。
  - F 宮沢川右岸の小径（踏み跡）に到れば、目印を見出す。小径降り方向の左側に「昭和58年4月農林水産省若松事業所」、また僅か下方の右側にある「境界見出し標42林野庁」の札が目印となる。
  - G さらに北西方向へ降り堰を過ぎると、明光寺林道入口に着く。この小径は明光寺林道入口と入りの清水を結んでいる。

\* 行程時間は藪の状態により異なるが、参考として記す。

稜線分岐（標高660m）→30分→青木麓山神社（標高550m）→60分→入りの清水への山路。

- \* 稜線分岐（標高 660m）から標高 550m 付近まで小径を記す、市販の会津若松市街地図<sup>27)</sup>があった。しかし青木麓山神社の記載はない<sup>27)</sup>。
- \* 昭和 40 年頃までは本稿で紹介した道筋とほぼ同じルートで踏み跡が存在したと考える。
- \* 滝澤<sup>14)</sup>は青木の麓山神社への登路入口を入りの清水（インの清水）としている。

### 3. 無名峰の名称推定

青写真地図と地形図（2.5 万）とを読み比べて興味深い無名峰の名を推定してみる。

- A 荒原沢山は荒佐原山（小田麓山神社が中腹に鎮座）である。峠山や風口山は登山路（小田山と麓山コース）の合流する峰の北方に在る。
- B 大平山は標高 684.9m 峰（合流峰よりふたつ南方の峰）付近に位置する。
- C 御徒萱山は 714.2m 峰（反射板跡から北にある峰）と考える。
- D 牛ヶ首は新編会津風土記に記されたヒダラハゲヤマ（干鱈兀山）である。

なお D については御山の照国寺付近で農作業中の老夫婦に無名峰（701m）の名称を<sup>ただ</sup>糾し、「牛ヶ首」であることを確認している。

### 4. 古代修験の目的・・・重なり合う山伏と山師の影

本来の修験（原始修験）の目的は永遠に生きながらえる命を求める事にある<sup>28)</sup>。この願いは古代における世界的な風潮であった<sup>13)</sup>。原始修験は金の化学的安定性と水銀の不安定性に着目している。即ち金を不変の象徴、また水銀を変化するものの象徴として捉えて、これを用いて神仙薬を得ようとした。具体的には水銀（丹生・辰砂）と粉末化した各種鉱石（金銀など含有）を高温で化学反応させ、より純度の高い金や効能ある神仙薬の製造を試みた。それには鉱山探索や鉱石採掘などに関する知識と技能が求められ、この点で修験者と山師の影が色濃く重なり合う訳である。

神仙薬（丹生）を適量服用すると細胞の新陳代謝が促進するという<sup>16)</sup>。例として服用ではないが、軽紛（水銀おしろい）は皮膚の染み（褐色の斑点）を薄める効能が知られる。中国では不老長寿を願う薬理効能を内服薬に求めて、製法秘法の丹薬を生んだ。丹生（水銀化合物）の採掘地は神聖な場所であり、薬草のそれと共に厳しく管理されたという<sup>28)</sup>。天平元年（729 年）には水銀中毒と推察される、山林修行者による造薬毒を禁ずる勅令がある<sup>29)</sup>。この勅令からみて当時の修験者は薬剤調合について知識を持っていたと示唆されよう。

社会で求める鉄製武器や農具の生産は鍛冶職人による高度な技術を必要とする。この背景の下に鉱山や金属精錬・鍛冶の技術者が各地から求められ、山師は全国を往来した。さらに熊野修験には<sup>いもじ</sup>鑄物師による「鑄物師大明神」信仰があり、各種鑄造物の専門技術者が護法の象徴として剣を携えて、山岳修験の徒に加わり遊行している。金属生産技術をもつ修験者は信者を求め何処へでも訪れ、とくに熊野修験は東北地方で活躍していたという<sup>31)</sup>。

しかし修験の教理として精神論が盛んになるにつれて、この秘薬製造に関する知識や技術（鉱石探索・金属冶金・薬物製造など）はその宗教的意義を薄め、次第に修験を志す人々は鉱山から離れていく<sup>28)</sup>。その後、埋蔵金属鉱石を探索する行動は修験道の最終目的のように解釈される。換言すれば、鉱山探索行動は経文を唱えての回峰や護摩焚きなどの行として受け継がれてゆくのである。

とはいえ元々山師のもつ鉱山技術や知識は時の権力者の注目的となる。即ち守護大名や戦国大名などはこの技術と知識を金銀鉄鉱山開発に利用し、自己の財力（戦力）の確保や拡大に努めた。このような実状から、従来通り山伏と山師の特徴を兼ね備えた職能人も確かに存在した。それらの職能人が後の社会に与えた影響も大きい

と言える。

## 5. 星神と鉦山

C. Gユングの「心理学と錬金術Ⅱ」では、星神と鉦山とを結びつけた信仰が生まれたという<sup>13, 30)</sup>。鉦山と修験との研究によれば、両者の関係は天空より隕石が落下する事実に基づくという。すなわち修験道では北極星を妙見神に、明星（金星）を虚空蔵神に<sup>なぞら</sup>準えていた。鉦山では妙見神を祀り、虚空蔵神と妙見神とを同体と見做した訳である。

## 6. 夜刀の神<sup>22, 23)</sup>

「常陸国風土記」の行方郡条に「夜<sup>や</sup>刀<sup>つ(と)</sup>の神」の伝承がある。ヤト・ヤツ・ヤチ（谷戸・谷津・谷地）は谷間の湿地を指す言葉で、夜刀の神はこの地の領有支配者である。夜刀（湿地）の神は勅命を受けた壬生連<sup>みぶのむらじまろ</sup>麻呂により討伐された。この伝承は稲作の普及に伴い湿地を水田に開墾し、水源から灌漑用水を得たことの証である。

## 7. 山伏塚の祠

祠の正面は東向きであるが、本来の向きは不明である。奴田山から吹矢山へ縦走した際に倒壊し散乱する祠を見出した。祠の散乱場所を尊重し、磁針に合わせその正面を東向きに立てた（三菱伸銅山岳部 伊藤一弘氏、吉岡保彦氏と同行、平成10年代初期12月下旬）。

## 8. ヌタ（山岳語彙）・・・文献<sup>32)</sup>より抜粋

甲州に多い地名、山腰または尾根筋の平地をいう。そこに聚落があればオオヌタ（大垓）尻のごとく地名となり、ノタ（野田）と転じて黒野田、野田尻などとなる。ヌタの語義は山中の湿地、猪のヌタバで知られたヌタ、ニタから出たとされている。猪が軀を冷やすために掘り返す湿地は、関東地方ではヌタバ、関西と東北ではニタバという。

## 文 献

- 1 渡邊幸夫、会津大学短期大学部研究紀要、69、2012—03—25。
- 2 東山の今昔、畑敬之助（発行人）・小熊和子（編集人）、会津史談会、羽黒山（p - 17、18）、大巢子（p - 10、11）、金の採掘（p-10）、小島印刷所、平成7年5月
- 3 市町村小字コード、www.kodokensaku.mlit.go.jp/motas/pdj/addr/k 東山町湯川・湯本（福島—58、59）、石山（福島—57、58）、門田町黒岩（福島—65、66）、門田町面川・御山（福島—65）、一箕町・松長・八角・八幡（福島—45）
- 4 日本山岳ルーツ辞典、監修池田末則、編者村石利夫、山の起源（p-115~116）、竹書房、平成9年12月5日（初版発行）
- 5 会津若松市役所財務部税務課所蔵地図、複写厳禁
- 6 新編会津風土記、第2巻、阿部隆一、ヌタノ原山・巢子村(p-130)、金の採取（p-30）、歴史春秋社、平成12年3月4日発行
- 7 青写真地図（手書き）、会津若松市役所税務課所蔵、複写厳禁、原図・作成時不詳

- 8 官林繪図面（複写）、黒岩村、明治8年
- 9 庄司吉之助（編者）、会津風土記・風俗帳、巻2、貞享風俗帳、新町諸品之覚書、青木山（p-72）、歴史春秋社、昭和54年11月
- 10 若松史、上巻、佐野氏随筆（p-847~848）、名著出版（復刻版、限定300部）、昭和49年
- 11 地形図（若松5万図）、旧陸軍陸地測量部作成、大正2年測図・昭和6年修正測図・同8年鉄道補入・同28年応急修正
- 12 武内正、日本山名総覧、p-115、白山書房、1999年3月
- 13 若尾五雄、金属・鬼・人柱その他、堺屋図書、東山の廃鉱（p-19）、永遠の生命（p-45）、妙見尊と鉱山（p-154~157）、虚空蔵尊と鉱山（p-160~162）、1985年7月
- 14 岩代国若松縣第一大区全図、南会津山の会復刻版（創立30周年記念事業）、限定60部、目黒實（原図所有者）、本図の複写・複製（コピー）は厳禁
- 15 老婦人の話（川溪集落出身、会津若松市湯川南在住）、平成24年11月
- 16 松田壽男、丹生の研究—歴史地理学から見た日本の水銀、早稲田大学出版部、アマルガム合金と金の冶金（p-23）、地名のニフを漢字で女布と表記（p-208）、入の字は丹生の転訛（p-206）、ハレとムタ（p-85、234）、昭和45年11月
- 17 滝澤洋之、青木山賛歌、青木山の麓山信仰（p-36~39）、妙見様と岩屋観音（p-12~15）、平成22年2月22日
- 18 日本山岳ルーツ辞典、監修池田末則、編者村石利夫、星ヶ尾山（p-1017）、星原山（p-985）、竹書房平成9年12月5日
- 19 浦西勉、日本民俗大辞典（下）、吉川弘文館、水分の神（p-599）、2000年4月
- 20 佐治靖、日本民俗大辞典（下）、吉川弘文館、ハヤマ・ハヤマ信仰（p-392）、2000年4月
- 21 本郷真紹、白山信仰の源流、p-12、法蔵館、2001年12月
- 22 三浦祐之、人と動物の日本史—4、信仰の中の動物たち、中村生雄・三浦祐之編、夜刀の神（p-241~243）、吉川弘文館、2009年4月
- 23 赤坂憲雄、境界の発生、講談社学術文庫、標の呪（p-148~154）、2002年6月、または 水曜の広場「老嫗茶和」を読む9、p-83、参考資料・編集作成—佐々木長生、2012年12月13日、於福島県立博物館
- 24 諏訪春雄、靈魂の文化誌—神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較研究、p-7~9、勉誠出版、2010年9月
- 25 佐藤一男、佐藤鉱山師の話、平成24年12月
- 26 宮家準、修験道—その伝播と定着、法蔵館、p-278、2012年9月
- 27 会津若松市街図（東北都市地図シリーズ）、昭文社、昭和43年3月
- 28 若尾五雄、鬼伝説の研究—金工史の視点から、修験道の本義（p-81）、p-92、中常坊（p-98）、唯心論修験道（p-102）、大和書房、1981年3月
- 29 五来重、山の宗教=修験道、合葉禁止令（p-150）、淡交社、平成11年10月
- 30 谷有二、日本山岳伝承の謎、一山名にさぐる朝鮮と金属文化、星神と鉱山（p-170）、未来社、1983年6月
- 31 民俗文化研究所、山と日本人—山伏の文化、大自然天地之大神教本庁、鋳物師（p-129）、昭和47年月
- 32 岩科小一郎、山岳講座 2、編者川崎隆章・近藤等、山岳語彙（p-114~125）、ヌタ（p-123）、白水社、1954年6月